『福田恆存を讀む會』 五月選擇評論：『戀愛と人生』

（全集第三巻所載。「婦人畫報」昭和二十八年一～七月號：四十二歳著）

發表者：吉野櫻雲

・戀愛（西歐的概念・新漢語）への適應異常・・・教育・西歐自然主義文學等に對してと同一。

・當評論も恆存の以下主論から發生して來てゐる、日本が持つ西歐近代適應異常の一つ。

「それ（西歐的概念）が身につく土壤が日本に缺けてゐるからである。とすれば、さう言ふ土壤（テキストP9圖）に生じた文學や藝術や學問が、或は政治や制度が、もし近代的に見えるとすれば、それは何處かにごまかしがあるに違ひ無い」（全七P393『醒めて踊れ』）。

・故に恆存は言ふ。「我々の血の中には、古い情事の意識が殘存してゐる。（中略）その（適應異常が招く）混亂を分析しなければ、いつまでたつてもわれわれは不當に惱み、不當に傷つかねばならないであらう」（當評論P326）と。 ⇒六月主題「戀愛感情の混亂」

⇩

・適應異常から來る西歐的概念の神格化（C2）現象・・・日本が持つ「精神主義的パターン」が招來する禍（テキストP9圖參照）。

•即ち、日本の精神主義パターンで「戀愛」を輸入しようとし、結果として適應異常し、「テキストP9圖」のC2化（美神・神格＝後楯化）になってしまふ。⇒「戀愛は神聖（C2化）である」（P333「北村透谷」）。

・その原因・・・西歐近代の如く、實證精神による「テキストP8圖」化、即ち「神に型どれる人間の概念の探究」化が出來なかつたから。（三頁參照）

〔參考：クリスト教〕・・・以下のクリスト教的背景が分からぬ爲に、戀愛も「適應異常」に繫がる。（當文P3參照）

・「受難」を意味するpassion の語源はpassive 。「情熱」は「受動」。それに身を委ねるは悪しき事と言ふのが聖書の思想。

・即ち、肉＝感情・戀愛感情に從ふは罪。肉は神意を遂げる處。「理想（神意）の地上（肉）的現實化」（P367）。

・「情熱・肉」に相對するのが精神（能動的概念）。肉體の受難に対して精神はそれに打剋つもの。イエスが「神の子」であるのは肉體の受難に打剋つ精神を持つてゐた事。それによつて神と繫がつてゐた。

「受難：passion 」とはさうした能動的・積極的概念の象徴。（『シェイクスピアの魅力』要旨に「聖書事典」語彙を加筆）

［P331下～2］:情慾の精神主義化（A⇒B化）・・・その根柢にあるクリスト教（西欧）と神道的生活態度（日本）

＊西欧と日本、いずれも「情慾A」をそのまま承認できず、精神主義化（A⇒B化）せざるを得なかつた。

＊對するに、「スペード（エゴ）をスペードとして認めよ」「性は生命のエネルギーの源泉」「性の快楽は生命の全體感・實在感に通じる手立て」「性愛は純粋なる生命の燃焼」と、肉・情慾の價値觀の復元を圖つたのがDHロレンス（P356）。

C:日本（神道＝美感）・西欧（GOD）

D1:神意・宿命・關係

上邊A:情慾・肉・自己愛（集團的自我）

下邊B:（個人的自我）

西欧:倫理・道徳・他者愛（クリスト教的）

日本:美感・美意識（神道的生活態度）

日本:AのB的擦り變へ。情欲（A）の美意識・美感的擦り變へ（B化）・・・神道的生活態度。「美意識を倫理的に陶冶」出來ず。

西欧:AのB的擦り變へ

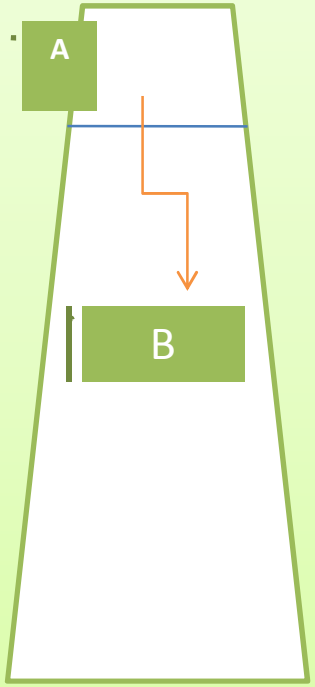
自己愛・情慾（A原罪）の他者愛（神の愛）化的承認。

『肉（A）に從ふは罪。肉は神意の遂げ處。性愛は神の象りである人間を生み増やす手段』（カトリシズム）

《日本明治以降》精神主義構圖の爲「美意識を倫理的に陶冶出來ず」。
A→B → C”＝ C2 （西歐概念の後楯化現象）

◎C2：後楯〔性の神格化・性の科學化〔フロイト〕〕

OC”
自己絶対視



西歐：中世（精神主義）

- 〔 結婚：クリスト教（カトリック）の教義。「すべてが神との關係」〕（一部『聖書思想事典：佛版』より轉載）
  ＊イエスと教会との關係と同一。「イエスが自分をわたして教会を救つた様な贖ひの愛」即ち夫婦が模倣とすべき生きた規範。「戀愛は結婚によつて初めて保證を得る」「結婚とは理想（C神の愛）の地上的現實（A）化」。
  ①イエス（夫）←服從←教会（妻）　②イエス（夫）→贖ひの愛→教会（妻）
  ＊「理想（神の愛・完全な愛・永遠の愛）の地上的現實化（P367上）」 『肉（A）に從ふは罪。肉は神意の遂げ處。性愛は神の象　りである人間（子孫）を生み増やす手段』『一夫一婦を結びつけるは神』『隣人愛・社會性の原點としての結婚生活』（P336上）

〔ルネサンス〕：中世の精神主義（神）からの脱皮

- 中世－神＝ルネサンス
- ルネサンス人の特色・・・「肯定的積極的な生命慾（A）と合理を貴重とする人間理性のたくましさ」　（『小説の運命Ⅰ』）

近代：「神に型どれる人間の概念の探究」

- 「神に型どれる人間の概念の探究」パターンの①・・・「神の愛」の個人主義的客體化と、その行き詰まり（畢竟「エゴイズム」に逢着）⇒「個人主義者はついに愛し得ない⇒①解決策「DHロレンスの思想」（P355参照）
- 性愛・情慾の科學化（精神の政治學ラインの下降化）⇒フロイト：以下赤文字参照・テキストP8圖。「科學技術と社會制度の民主化との過程が進むにしたがつて、それまでの精神の領域（B：個人の純粋性）に屬してゐた問題が、逐次物質の領域（A：支配被支配の自己）に移されて、物質の問題として解決されていつた。物慾に克といふ克己の倫理（Bの領域）も、充分に慾望する物質を生産（Aの領域）するといふことで解決されてしまふし、病苦に堪へるといふ美徳（Bの領域）も、醫學の進歩（Aの領域）が徐々にそのやうな精神の無益な負擔を輕減しつつある」（『近代の宿命』全二P453）

《「戀愛」と言ふ西歐的概念への適應異常》

以下の用法は『獨斷的な餘りに獨斷的な』で、「（西歐）自然主義」（西歐的概念）への「適應異常」について使用した（取消文含む）用法である。その用法は、同一的西歐概念である「戀愛」にもそつくり應用が利くと思へるので赤字で加筆し、探究してみた。いかがであらうか。

P342上～6「日本人の風俗と肉體がそれに反抗する」・・・とは何を言はんとしてゐるのであらうか。
「日本人の意が姿を裏切る」（『醒めて踊れ』P399）と言ふ事を言つてゐるのである。即ち換言すればかう言ふ事である。

「關係（D1）と称する實在物は潜在的には一つのせりふ（言葉）によつて表し得る」。その恒存の言に從ふならば、西歐近代との關係（實在物）である「近代化」を表しうる言葉の一つとして戀愛~~「（西歐）自然主義」~~が上げられる。そして明治日本は前近代であるが故に、その戀愛~~西歐自然主義~~を當然「ハードウェア」として受け止めざるを得なかつた。
換言すると、「近代化」といふ關係、それを表する「戀愛」~~「（西歐）自然主義」~~の言葉を、それら新漢語に對する用法（「So called」）で、正常な關係に「形ある『物』として見せる」と言ふ、「ソフトウェア」の藝當が明治日本では出來なかつた、と言ふ事に繋がるのである。具體的にはどう言ふ事を示すかと言へばかうなる。
戀愛~~（西歐）自然主義~~は、~~たとへ唯物論に歸因するとしても、より本質的には『神に型どれる人間の概念の探究』と言ふ近代化の一形態であつて~~、その背景には觀念論としてのクリスト教（洋魂）がある。
故に、西歐が近代で戀愛~~「自然主義」~~に客體化して見せた「神に型どれる人間の概念の探究」を、やはり明治日本も近代化を移植するに當たつて、同じく「形ある物として（~~日本自然主義~~日本的特色『惚れる』の裏に）見せる」必要があつた。その藝當が「ソフトウェア」としての「So called」なのである。が、現實的可能性としてはそれが出來なかつた。
「觀念論⇒唯物論」経緯の不理解は勿論の事、それが故に「戀愛~~自然主義~~」を單なる「寫實」(後楯化＝神格化・性の科學化）としてしか移植出來なかつたのである。恒存流に言へば、上記「ハードウェア（近代化・戀愛）」に對する精神の政治學としての「ソフトウェア」を持つ事が出來なかつた事にそれは繋がり、此處に西歐近代への文學上（戀愛上にも）「適應異常」が明確に示されていると言へるのである。そして更にそれは今日も（P535上：最終文も同意）と、言ふ事に。（參照：『醒めて踊れ』・『せりふと動き』）
即ち「精神の近代化（個人主義化）」が出來なかつたが爲に、個人主義的客體化が出來なかつたと同時に、「戀愛は神聖である」（P333「北村透谷」）も「性の科學化（フロイト）」も、自己絶對視の爲の後楯化現象に陥らざるを得なかつた。と言ふ事になる。